



Yoshiyuki Kizawa

現代社会の病理の一つは、孤独、だと思ふ。孤独や社会的な支援の不足によって引き起こされる病には枚挙にいとまがない。COVID-19により、自分の大切な人と一緒に過ごすことさえ難しくなっている今、どのようにしたら、大切なつながりをつくり、保ち続けられるかを考えていきたい。



Satoshi Nozawa

科学は普遍性という共通の基盤を人類に提供することによって、対立を解消すると考えられてきたが、AI(人工知能)、気候変動、ワクチン問題など近年では、争点となることが目立つよう見える。直面する諸問題を直視しつつ歴史の森に分け入って、科学とともに未来を拓く可能性を探りたい。



Mitsuyoshi Murayama

コロナ禍でスポーツを始めとしたイベントの自粛・規制が生じている。スポーツの価値は普遍的と思い込んでいたが、コロナとともに足元を掬われそうである。スポーツとは何かを再考し、新しいスポーツとの関わり方を見出したい。

コロナによる 新しい社会と 生活様式とは？

COVID-19 がもたらした外出や社会的接触の自粛による生活様式の変化が新しい時代を創ると言われる。「テレワーク」「オンライン〇〇」はもはや流行語でもなく、日常化して新しい社会の基盤となりつつある。しかし、新しい生活様式への移行が急激に進むのかは不明瞭である。今回は、こうした「ニューノーマル」の行方についていくつかの分野から話題提供を頂くとともに、コロナ禍に体験・進行している生活の変化を自由な形で語り合う場を設け、多様な視点でこの問題の課題と未来を考える。

ZOOMにて開催

1月23日(土) 19:00~21:00

19:00~20:00

第1部

「新しい生活様式」への3つの投げかけ

その1: 木澤 義之(神戸大学医学部特命教授)

あなたにとって大切なことはどんなことですか？

その2: 野澤 聡(獨協大学国際教養学部准教授)

科学史からみたコロナ禍とは？

その3: 村山 光義(慶應義塾大学体育研究所教授)

コロナ時代にスポーツの意味を再考する

20:00~21:00

第2部

自由談論会

お申込みは、GOOGLEフォームにてエントリーください。後日ZOOM IDをお送りします。こちらのURLにアクセス！

<https://forms.gle/par9DoVpw43z17M86>

第一部 提言者紹介

木澤 義之

きざわ・よしゆき

PROFILE

88 回生。諏訪中学校出身。筑波大学医学専門学群を卒業し医師となる。専門は緩和ケア。現在神戸大学医学部特命教授。日本緩和医療学会理事長。緩和ケアの診療・研究・教育に従事しています

「あなたにとって大切なことはどんなことですか？」

自分の死に直面している人を相手にした仕事をしている都合上、こう問いかける機会が多くある。代表的な答えとして「家族など自分の大切な人とできるだけ一緒に過ごすこと」、「家族や社会において役割を果たせること」がある。Covid-19 によってこれらの強い願いを叶えることが難しくなっている。どうやらその終息には最低でも1年はかかりそうだ。現代社会の病理の一つは、孤独、だと思う。孤独や社会的な支援の不足によって引き起こされる、もしくは悪化する病には枚挙にいとまがない。高血圧、糖尿病、心不全、アルコール依存症、不安障害、うつ病...そして自殺者は今年急増している。この機会に、人と人とのつながりを見直すのはどうだろうか？テレコミュニケーションをフルに活用するのがまず行うべきことだが、リスクを最小化して実際に合うことも大切だと感じている。皆さんとどのようにしたら、大切なつながりをつくり、保ち続けられるかを考えたい

野澤 聡

のざわ・さとし

PROFILE

88 回生。茅野市立北部中学校出身。京都大学理学部で宇宙物理学、同大学文学部・同大学院文学研究科・東京工業大学大学院社会理工学研究科で科学史・科学技術社会論を専攻。現在は獨協大学国際教養学部准教授として科学史・科学技術社会論の研究・教育に従事

科学史から見たコロナ禍とは？

COVID-19 の世界的流行に煽られるように、社会的対立が世界的に広がっている。これまで科学は普遍性という共通の基盤を人類に提供することによって、対立を解消すると考えられてきたが、AI（人工知能）、ゲノム編集、気候変動、ワクチン問題などのように、近年では、争点となることが目立つように見える。もはや科学は人類の希望ではなく不安の種になりつつあるのだろうか。科学の歴史を紐解くと、人類はつねに科学と緊張関係にあったことが分かる。歴史は私たちの進むべき道を教えてくれるわけではないが、視野を拡げたり考えるヒントになったりする事例には事欠かない。直面する諸問題を直視しつつ歴史の森に分け入って、科学とともに未来を拓く可能性を探りたい

村山 光義

むらやま・みつよし

PROFILE

88 回生 岡谷東部中学出身。陸上競技部所属。高校2年時に学友会長。順天堂大学体育学部卒業後、大学体育教員、スポーツ科学研究者として教育研究に従事。現在、慶應義塾大学体育研究所教授

コロナ時代にスポーツの意味を再考する

コロナ禍でスポーツを始めとしたイベントの自粛・規制が生じている。観客動員の減少はスポーツ産業にも厳しい。”する・見る・支える”というスポーツのコンセプトの浸透を目指すスポーツ立国戦略が揺らいでいる。スポーツは本来、自発的な気晴らしであり、生活に密着したものである。しかし、すること、支えることが抑制されている。見るものとして、また人々を勇気づけるツールとしても果たして機能するのであろうか。私自身、スポーツの価値は普遍的と思い込んでいたが、コロナとともに足元を掬われそうである。2020 オリパラ開催の是非以上に、スポーツとは何かを再考すべき事態になったと痛感しています

第2部 自由談論会

第一部の投げかけを踏まえ、ご自身の体験や現状感じていること、自分自身が考えるこれからの方向性など、自由に語り合う場とします。同窓生との新しい出会いやコミュニケーションをお楽しみに